

## 名古屋大学 松尾 清一総長に聞く

# 世界に誇る名古屋大学が150周年 「地元の熱意、歴史と文化に支えられ」

名古屋大学は東海地区、いや日本にとって世界に誇らしい最高の大学です。気象に関する研究で今年のノーベル物理学賞に輝く真鍋淑郎博士はかつて特別招へい教授として在籍、真鍋氏を含め28人の日本人ノーベル賞受賞者のうち実に7人が名大関係者です。名大出身者ならずとも自慢したくなるのは当然でしょう。それは、150年間も研究・教育の拠点としてあり続けた歴史と伝統、そして愛知・名古屋という地域に支えられたからだと考えます。この歴史的節目を総長として迎えられる松尾清一さんに名大の歴史と未来についてお尋ねしました。「地元の熱意に支えられた自由闊達な学風」を強調された松尾総長の貴重なインタビューをお届けします。(編集長・塚本隆)

### かみ合った大学振興と地域創生

——創基150周年を迎える名大の「伝統の重み」についてどう感じられますか。

**松尾** 名古屋大学は明治4年1871年に設置された旧尾張(名古屋)藩仮病院仮医学校が源流になっており、1939年には医学部と理工学部からなる国内では7番目の帝国大学になりました。戦後は8学部8大学院からなる総合研究大学として整備され、今日まで発展を続けてきました。

伝統の重みというのは、二つの要素からなると思っています。第一は、この地域にわが国を代表するような国立大学を作りたいという、地元の強い願望と意欲です。名古屋大学は今ではわが国を代表する研究大学の一つとなっていますが、150年前から今日まで地域との結びつきは大変強く、いい意味で大学振興と地域創生がかみ合っている好事例です。この点は未来の名古屋大学を創っていく上で、大きな財産でありまた伝統であると思います。

第二は、帝国大学になって5、6年で終戦を迎え、大学づくりが極めて厳しかったと想像できます。ほぼゼロからの出発だったのかもしれない。しかし、キャンパス整備とともに、全国から優秀な中堅若手研究者を集め、新しいがゆ

えに自由闊達な学風が形成されてきたものと思います。多様な人たちが集い、職階や領域を越えた交わりのあるキャンパスの形成です。21世紀に入ってノーベル賞受賞者を6名輩出し、また産業界のリーダーも数多く送り出しましたが、その背景としてはこのような伝統と文化があったものと思います。

### 岐阜大学と共に未来へ

——岐阜大学とも連携されますか。

**松尾** このような伝統と文化の上に、如何に「地域創生への貢献と国際的な競争力」の両方を兼ね備えた名古屋大学を創っていくかが課題です。これら二つの目標を達成するためには一定の規模と質を兼ね備えたインパクトが必要です。岐阜大学もまさに未来を見据えて同じ考えを持っており、昨年(2020年)4月にわが国初の国立大学法人同士の統合を行い、新たに国立大学法人東海国立大学機構(以下、東海機構)を設立しました。未来に向けて発展する新たな国立大学法人モデルとして発展させたいと思っています。

——世界的な研究レベルをどう次世代に引き継いでいけますか。

**松尾** 研究力強化の第一は、これまでのノーベル賞受賞者の系譜をさらに発展させる世界最

先端研究拠点として、IT b M(トランスフォーマティブ生命分子研究所)、KMI(小林・益川素粒子宇宙起源研究所)、CIRFE(未来エレクトロニクス集積研究センター)があります。名大ではこれらを飛躍的に発展させるべく、大学を挙げて支援しています。これらに加えて法人統合を機に先端研究の幅を一層広げるべく、新たに糖鎖生命科学の世界拠点の構築を進めています。まさに日本が世界のイニシアティブをとれる研究分野として、世界最強を目指した研究拠点形成事業です。

第二に、これからの研究を支える若手世代育成やダイバーシティー環境の実現にも大きな力を割いています。世界中から超優秀な若手を集めるYLC(Young Leader Cultivation)プログラムは競争率10倍以上の狭き門となっています。さらに全国最多の4つの卓越大学院プログラムを走らせて分野融合による次世代高度人材の育成をスタートさせ、本年から大学院博士後期課程学生に対する経済的支援も大きく充実させて、研究力の充実を図っています。

第三に、大学の力はひとり一人の教職員の力に依存していますから、如何に素晴らしい人材を集め、それぞれの能力をフルに発揮してもらうかが今後の発展の鍵です。これからは国内外から卓越した研究人材を集められる環境整備を進めていく予定です。

### 地域を丸ごと変革、イノベーションを進める街に

——地域、住民とのかかわりや社会貢献については。

**松尾** 今という時代は、世界的に見ればデジタルトランスフォーメーション(DX)、AI、IoTの急速な進展でかつてない規模とスピードで変化しています。一方で、地球温暖化や環境汚染、格差の拡大、大国間の覇権争いの激化、など人類社会を脅かすような深刻な課題を多く抱えています。わが国においては少子超々高齢化と人口減少、東京一極集中、ソフトハード含めた多くのインフラの老朽化や立ち遅れ、巨額



の財政赤字、科学技術分野での存在感の低下等が明らかになってきており、持続可能でレジリエントな社会をどう創るかが大問題であり、未来型の地域分散型社会への転換は喫緊の課題です。

東海地域は20世紀半ばから今日まで世界有数の製造業の集積地であり、世界でもっとも成功した地域のひとつです。しかし今は、世界が急速に変化し、産業も、また人の生活そのものも変わらざるを得ない時代。誤解を恐れずに言えば、一つ間違えばこれまで繁栄を誇ってきたこの地域がラストベルト(産業が低迷し錆びついた地域)になるリスクが大いにある。名古屋大学は法人統合前から東海地域を丸ごと変革し、世界有数の人間中心のイノベーションを進める街にするために貢献しようというNU-PRACTISS(Nagoya University's Plan to Renovate Area Chubu into Tech Innovation Smart Society)構想を掲げていました。岐阜大学とは法人統合後もこのコンセプトを共有し、TOKAI-PRACTISS構想として推進しています。スタートアップベンチャーの育成支援も次世代産業の創出には欠かせません。市民、自治体、産業界など多様なステークホルダーとの連携協働で地域課題と人類社会の課題解決に果敢に取り組み、次世代を作り支える人材を輩出す